

自著と  
その周辺

Urologic management of the  
spinal cord injured patient  
A Joint SIU-ICUD  
international consultation

Editors : Sean Elliott and Reynaldo Gomez

ISBN978-1-7750334-0-0

472項

2017年刊行

5.2 Bladder Neck Procedure

209-213, 2017

Published by the Société  
Internationale d'Urologie (SIU)

本著は、SIU (Société Internationale d'Urologie : 国際泌尿器科学会) と ICUD (International Consultation on Urological Diseases : 泌尿器科疾患国際協議) との共同制作により出版されている。本著では脊髄損傷後排尿障害の管理法について詳細かつ明快に記述されている。脊髄損傷は、排尿障害の原因疾患 (病態) でも、特別に扱われることが多く、学会レベルでも教科書レベルでもセッションが分けられる。それだけに、頻度・重要性・学術的な意義が高く、基礎研究においても脊髄損傷動物を用いた排尿の研究は盛んである。しかしながら、学術報告やエキスパートの意見を統合することは容易でなく、実診療における脊髄損傷患者の排尿管理には若干の混乱があるといえる。そういった背景を受けて、本著は脊髄損傷患者における排尿障害を、ガイドライン的に統合的な見解を取りまとめたものである。編者は2人で、9部門のcommitteeが基本構成である。各committeeそれぞれにChairがいて、24カ国からco-chairを含む67人のmemberが制作に参加した。日本からは3人のmemberが参加している。東邦大学医療センターの関戸哲利教授と、当学から石塚修教授と小生が参加した。余談であるが、関戸教授は小生にとって高校の大先輩にあたり、ご縁を感じる。以上のように、本著では構成員が多いうえ国際的に多彩で、編者が取りまとめにしても大変な苦勞があったはずである。一方で、その著者に小生が選ばれたことは大変に光栄なことと思う。小生に執筆が任されたのは、小生が留学したBelgium, Antwerp Universityの恩師、Jean-Jacques Wyndaele教授からの推挙があったことだった。Wyndaele教授は、脊髄損傷の大家である一方で、排尿の求心性神経の研究におけるパイオニア的な存在でもある。2012年に私が日本へ帰国したあとも、こうして仕事を振り分けてくれるあたりは、逃れられない上下関係を感じながらも、大変に嬉しいことでもある。本書の内容は、各セッションでレビューが行われ、ガイドラインのようにエビデンスレベル (I-IV) と推奨グレード (A-D) を決めるものである。レベル、グレードの設定は細かに設定されていて、各著者には支持が出た上で執筆が行われた。Clinical Questionはないものの、各項目での診断や治療のエビデンスとグレードが明確にされる。それにより本著は、脊髄損傷患者における排尿管理の診療に、大いに役立つものとなっている。本著は、SIUのホームページから会員用の教育プログラムにアクセスし、PDFをダウンロードすることができる。(https://academy.siu-urology.) 小生が執筆を行ったのは、Surgical management of neurogenic bladder after spinal cord injuryの項目で、そのなかでも、bladder neck closure (膀胱頸部閉鎖術) に関して、執筆を行った。bladder neck closureは、排尿障害の外科的アプローチとして一般的とは言い難い、かなり特殊な項目である。単純な閉鎖は意外と難しく、再開通の問題がある一方で、まとまった研究が少ない難題である。性質上、前向き試験ができないため、高いエビデンスや推奨グレードが得られない内容ばかりである。それでも、過去の報告をまとめながら、現時点の段階で推奨できる程度について言及を行った。分担著書としてわずか4ページではあったが、エビデンスレベルや推奨グレードを意識した文献検索は初めてだったので、良い経験がすることができた。小生の執筆内容はかなり特殊なので、広く役立つ内容に触れたとは言い難いが、本著全体ではかなり広汎かつ詳細に、脊髄損傷の排尿障害管理について言及されている。本領域での診療・研究では、バイブル的な存在なのではないかと思う。

(信州大学医学部泌尿器科学教室 皆川倫範)